

パーキンソン病および関連疾患における前駆症状について

研究分担者： 武田 篤

国立病院機構仙台西多賀病院

研究要旨

パーキンソン病では運動症状に加えて様々な非運動症状を認めるが、非運動症状の一部は黒質線条体系以外への病理進展の結果生じると考えられており、疾患進行度の指標や予後予測マーカーになりうるものと注目されている。本研究ではパーキンソン病の様々な症状の出現時期を明らかにし、予後予測に有用な症候を明らかにしようとしている。パーキンソン病の薬剤調整・リハビリテーションの目的で入院検査を受けた患者を対象に、prodromal PD 診断基準に準拠するように独自に作成した構造化インタビューを用い、様々な非運動症状の出現時期を調査し、運動症状の出現時期と比較検討を行った。その結果、非運動症状には病初期に頻度が増すもの・進行とともに頻度が増すもの・二峰性のピークを示すものが存在した。二峰性のピークを示したレム睡眠行動異常症について、出現時期によって臨床像に変化が生じるかを比較したが明確な差は指摘できなかったが、レム睡眠行動異常症を認めた場合には他の非運動症状を複数認めることが明らかとなった。

A. 研究目的

パーキンソン病では運動症状に加えて様々な非運動症状を認めるが、非運動症状の一部は黒質線条体系以外への病理進展の結果生じると考えられており、疾患進行度の指標や予後予測マーカーになりうるものと注目されている。本研究ではパーキンソン病の様々な症状の出現時期を明らかにし、予後予測に有用な症候を明らかにしようとしている。

B. 研究方法

パーキンソン病の薬剤調整・リハビリテーションの目的で入院検査を受けたパーキンソン病患者のうち検査を完遂した 69 名を対象に、prodromal PD 診断基準に準拠するように独自に作成した構造化インタビューを用

い、様々な非運動症状の出現時期を調査し、運動症状の出現時期と比較検討を行った。

(倫理面への配慮)

本研究は倫理委員会の審査済みである。

C. 研究結果

非運動症状には病初期に頻度が増すもの・進行とともに頻度が増すもの・二峰性のピークを示すものが存在した。二峰性のピークを示したレム睡眠行動異常症について、出現時期によって臨床像に変化が生じるかを比較したが明確な差は指摘できなかったが、レム睡眠行動異常症を認めた場合には他の非運動症状を複数認めることが明らかとなった。

D. 考察

非運動症状の出現時期による臨床的特徴の違いは明らかにはならなかったが、レム睡眠行動異常症を認めた場合には複数の非運動症状を伴いやすく、より広い病理進展を表す症候と考えられた。

E. 結論

レム睡眠行動異常症の有無については病初期だけでなく、経過中にも確認する必要があると考えられた。

F. 健康危険情報

なし
(分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表 (2022/4/1～2023/3/31 発表)

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし